

墨書のある糸杵

—第99次

1 はじめに

平城宮東面大垣の外側を南北に流れる東二坊坊間路西側溝SD5780では、1976年に墨書のある糸杵が出土している（第99次調査、『1976 平城概報』）。最近木簡の再訳読をおこなう中で、墨書部分に関しては赤外線写真撮影をおこない公表した¹⁾。しかし、実測図は未公表であったため、その位置づけを含めてここに報告する。

2 糸杵出土地点の概要

第99次調査では現在東院庭園として復元されている園池遺構SG5800のほか、東面大垣SA5900、そして東二坊坊間路西側溝SD5780などを検出している（図340）。ここに報告する糸杵が出土したのは、東面大垣を横切る東西暗渠SD8436がSD5780に合流する位置で、出土層位は灰色砂質土（第3層）である。この付近では、天平15～20年（743～748）の年紀をもつ木簡が出土しており、土器や瓦の年代観をあわせ、奈良時代後半にはこの溝が埋没したことがわかっている。

3 糸杵の形態と墨書

出土した糸杵は、ほぼ完形で4本の杵木と横木2本を十字に組んだもの2組からなる（図341-1）。杵木は、中央に最大の太さをもち、上下2ヵ所の横木の挿入孔から両端に向かってすぼまるもので、削り込みをもたない。腹面は平坦に背面は弧状に整形し、丁寧な面取り加工を施す。長さは21.9cmで、断面の厚さは中央部で長軸1.8cm、短軸1.5cm、両端で0.7cm。横木の挿入口が円形で大きさは、上部が径0.8cm、下部が径1.0cm。横木は中心部を相欠き仕口とし、軸棒を通す孔（軸孔）をあける。横木の両端は断面円形の棒状に削り出す。横木の長さは完形で10.8cm、幅は2.6～2.9cmで、幅は一定ではない。また中央部の軸孔の大きさも上部が径0.9cm、下部が径1.1cmで下部のほうが大きい。

この糸杵は、杵木、横木、軸孔の大きさから中型品で、横木の挿入孔が円形であること、杵木の加工度は、削り込みをもたないなど相対的に低いことから、東村純子氏

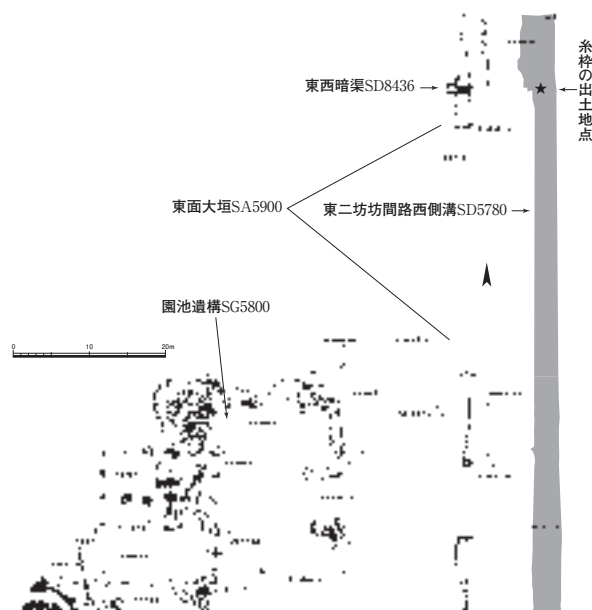


図340 第99次調査遺構図（『1976 平城概報』より作成）

による分類²⁾の円1型にあたる。上部の横木2本の中央平坦面に次のような墨書がみられる。

籩
糸 四 東
非 一 両 二
斤 分

図341-1にみるように、これらの文字は横木の軸孔や仕口を避けるように配置されており、2枚の横木を十字に組み合わせた後に書かれていることはあきらかである。

「籩」は『古事類苑』よると「わく」と読み、糸を絡める、収める道具とあるから、糸杵そのものを示し、墨書の流れからみて「四両二分」はその重量、「糸一斤」も糸のそのものの重量と考えられる。この両隣には「非」と「東」と書かれる。位置関係や筆跡から他の墨書と同機会に書かれたと考えられるが、意味未詳である。（芝康次郎）

4 本資料の位置づけ

平城宮・京から出土する紡織具は、紡錘車や杵などの製糸具がほとんどなく、製織具である認めかけや中型の糸杵が主体である。このことから多くの場合、地方から認めの形で運び込まれ、平城宮・京内では製織工程がおこなわれたと考えられている。また糸杵はより加工度の高い宮都Ⅰ（円2）・Ⅱ（円3）型が主流であることが知られる³⁾。本資料は、中型という点では上の見解を支持するが、加工度が低い円1型である点は例外的な事例かもしれない。ただ、杵木は丁寧な面取り加工が施されており、形態上の差として理解してよいだろう。

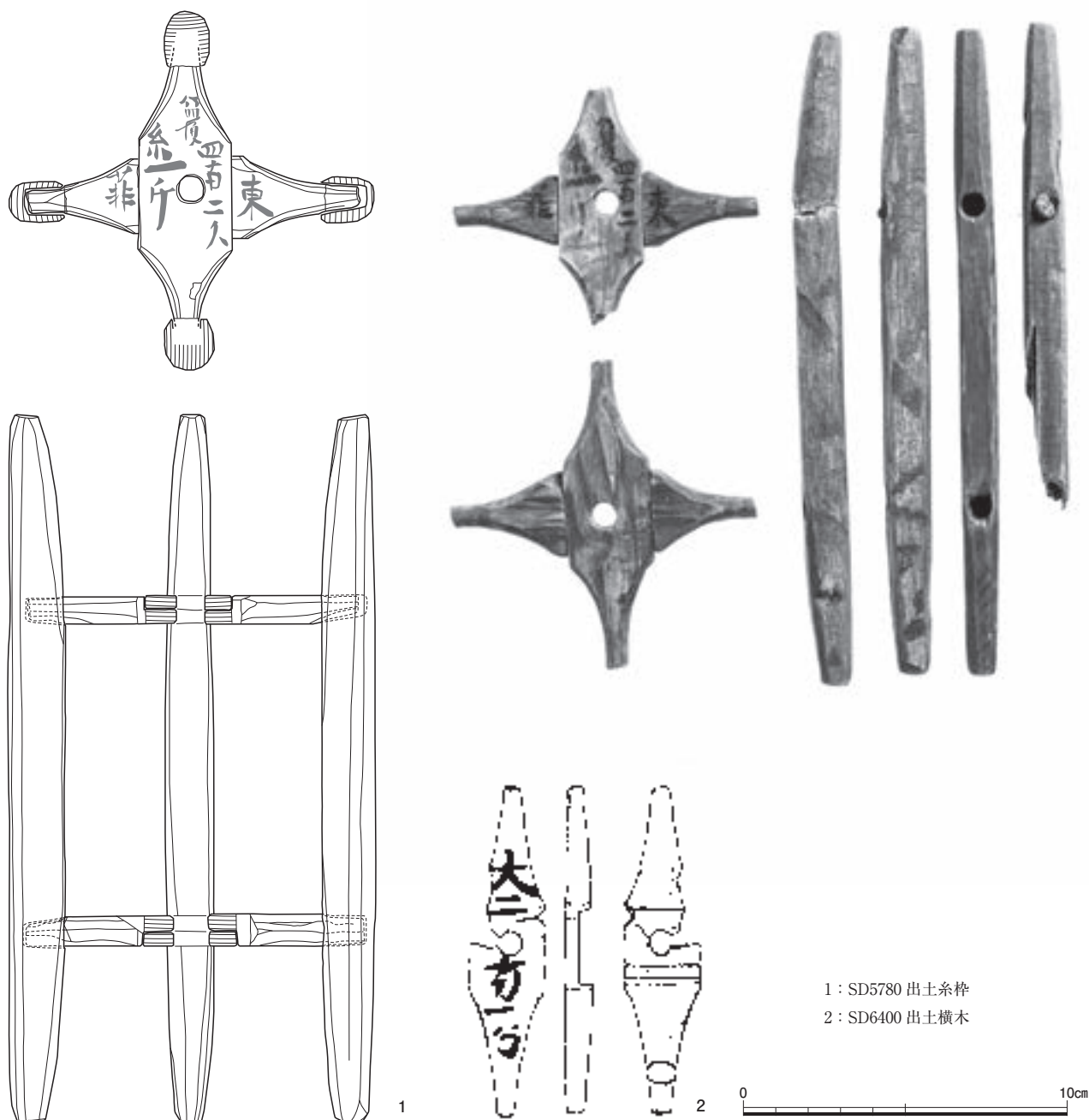


図341 糸杵実測図（1：2）および写真

横木の墨書は、糸杵と糸の重量と考えられ、既往研究から推して地方から運び込まれた際あるいは管理時の重量を示している可能性が高い。

墨書のある糸杵は、平城京左京七条一坊の東一坊大路西側溝SD6400からも出土している⁴⁾。図341の2は横木で、一部破損しているものの、その平坦面に「大二両一分」と墨書されている。軸孔を避けて重量が記されている点でSD5780の糸杵と同様だが、「大」とする点は大両を示している可能性がある。この場合、SD5780出土のものは、小両を単位としていると考えられる。

木簡（文書や付札）には、「紺糸二斤六両一分」（『平城宮木簡1』57号）、「緋糸三両五分」（『平城木簡概報』34-326）と書かれたものがあるが、数値に規則性は認められない。これらは総状態の重量を示すと考えられるが、今回

報告したように糸杵に重量が記されているということは、糸が総の状態だけではなく糸杵の状態でも重量で流通、管理されていた可能性を示す。これら資料は平城宮・京内での紡織体制の一端を示すものとして重要である。

（芝・浦 蓉子）

註

- 1) 渡辺晃宏「1977年以前出土の木簡（38） 奈良・平城宮跡」『木簡研究』第38号、木簡学会、182-190頁、2016。
- 2) 東村純子『考古学からみた古代日本の紡織』、六一書房、2011。
- 3) 註2に同じ。
- 4) 奈文研『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』、1993。